

日本における医学のシンボル 「アスクレピオスの杖」の受容

古川 明

はじめに

医学の紋章（シンボル）としては、世界の各国で「アスクレピオスの杖」が用いられている。ギリシャ名アスクレピオス Asklepios のローマ名はエスクラピウス Esculapius で、彼は医学、医術の神である。その杖には一匹の蛇がからまり、健康、不老、長寿などを象徴している。蛇は古くから善悪二面で扱われているが、善の面だけみると、蛇が脱皮して新しい体となるので、復活、再生を示し、また多くの伝説などから、守護、魔力、神秘、大地の力などを象徴し、聖書のことば「蛇のように賢く」から、賢慮も表現する。杖は地上に生長する植物的生命を示し、權威、命令、指揮力などを象徴している。

一 ハイステル著『外科学』蘭訳本の扉絵

筆者は「アスクレピオスの杖」がはじめてわが国に紹介されたのは、ドイツのハイステル著『外科学』Laurens Heister: Chirurgie, 1718 の蘭訳本 Hendrik Ulhoorn: Heelkundige Onderwyzingen, Amsterdam, 1741 の扉絵に描かれたものだ



図2 ハイステルの肖像（ハイステル『外科』のラテン語本より）
I.G. Wolfgang (1729年画)

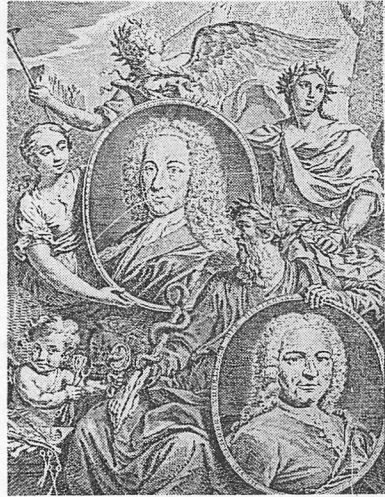


図1 ハイステル著『外科学』蘭訳本の扉絵

と推定している(図1)。ハイステル著『外科学』には蘭訳のほか、ラテン語、英語、フランス語、イタリア語、スペイン語訳もあるが、この扉絵は蘭訳者ユルホルン(一六八七〜一七四六)がとくにつけたもので、ドイツ語の原本やその他の翻訳本にはもちろんない。

ハイステル(一六八三〜一七五八)(図2)はフランクフルト・アムメインに生まれ、ギーセンで医師となり、一七〇七年からオランダの軍医となつて、外科実地経験を積み、一七二〇年からヘルムステットの外科学教授だつた。ユルホルンはライデンに生まれ、一七〇七年に医師となり、一七〇九年から軍医として活躍した。一七一五年からアムステルダムで外科医として働き、解剖も行つていた。二人は軍医としてたがいに尊敬しあう仲だつた。

『蘭学事始』によると、杉田玄白は明和四、五年ごろ(玄白の記憶は誤りで、正確には明和六年、一七六九年)、オランダ商館長ヤン・カランスの江戸参府に付添つてきた大通詞吉雄幸左衛門から、『ハイステルのシュルゼイン』とよばれたこの書物(ハイステル『外科学』の蘭訳本)を見せてもらったと記載している。玄白はその書物のなかの図が精巧なことに感嘆し、そ



図3 大槻玄沢『傷医新書』の表紙



図4 越邑德基『傷科精選図解』の表紙

の書を借りて、幸左衛門の江戸滞在中に徹夜までして、図を写したという。

この書物の扉絵に「アスクレピオスの杖」が描かれているが、玄白にはそれが何のことかまったく理解できなかったにちがいない。玄白はのちに本書の日本語訳を開始したが、中途から、これを門弟大槻玄沢に依頼した。玄沢は『傷医新書』の題名で、寛政五年（一七九三）に、この蘭訳本の大部分を翻訳したが扉絵とその解説は省略されている（図3）。この絵は、玄白や玄沢のあと、蘭学者をはじめ多くの人びとに鑑賞され、越邑德基著『傷科精選図解』^{（五）}（文政三年、一八二〇、図4）には、牧墨遷の銅板画として掲載されたが、その解説はない。

昭和四十九年、東京日本橋の三越本店で開催された「洋学二百年記念展」の解説書^{（七）}のなかで、筆者はこの扉絵を見て、そのなかに「アスクレピオスの杖」が描かれていることに深い印象を受けた。しかしそのときは、筆者はこの絵の意味をはっきり理解できなかった。その後この蘭訳書^{（八）}の实物を見たとき、扉絵にはオランダ語による詩文形式の解説 Verklaaring van de Tielprint^{（九）}があることを知った

(図5)。昭和五十二年大鳥は「ヘーステル外科書の解説」で、「扉絵を掲載しているが、扉絵の解説には言及していない。それ以来筆者はこの扉絵のオランダ文解説の日本語訳の有無を調査したが、ついに見つからなかった。

そこで筆者はオランダ語にはあまり自信がないが、翻訳を試みた。詩文であることと、古いオランダ語なのでむずかしかったが、オランダ語に堪能な友人やオランダ人、フランドル系ベルギー人たちの知人の指導と援助を受けて、その大意を知ることができたので、昭和六十一年十二月、日本医史学会と蘭学史料研究会の合同例会で報告し、その後『医学のあゆみ』にも概略を掲載した。扉絵に描かれた「アスクレピオスの杖」はアスクレピオスの父医神アポロンに握られている。アスクレピオス自身の像がどこにもないこの絵の作者は、この杖が医学のシンボルであることを読者に理解させたかったのではないだろうか。

二 「扉絵の解説」の翻訳

解説は美しい詩文であるが、筆者には詩文で翻訳できないので、散文として意識した。

De God der Heelkonst, en de Heelkonst zelf vertoonen

Hier door de Tekonkonst twee van haar echte Zoonen,

Hoogleeraar HEYSTER, als Machaon wydbefamend

En schrandere LIHOORN, recht een Podalier genamend,

ここには医学の神（治癒神アスクレピオス）と、医学そのものが、ハイステル教授を有名なマカオンとして、また有能なユルホールンをまさしくポダレイリオスとして、彼（アスクレピオス）の本当の息子二人の肖像画で示されている。

(注) ハイステルとユルホールンは二人ともオランダ軍の軍医である。マカオンとポダレイリオスはアスクレピオスの息子で、ともにトロイア戦争に従軍したギリシャ軍の軍医である。「有名なマカオン」と訳したが「有名な」はハイ

VERKLAARING
VAN DE
TITELPRENT

DE *Ged der Heelkonst*, en de *Heelkonst* zelf vertoonen
Hier door de Tekenkonst twee van haar echte Zoonen,
Hoogleeraar HEISTER, als *Macchab* wydbesam
En schrandere УЛЮОМ, recht en *Fedaler* genasmd,
Dewyl hy op 's Mans spoor, een langen reeks van jaaren,
En door zyn iever, en zyn oordeel, geest en vlyt,
Zich zelf die schoone Konst geheel heeft toegewyd.
De Heelkonst oeffende by Mavors legerscharen,
En door zyn iever, en zyn oordeel, geest en vlyt,
De *Liefde*, een Kindje houd in de eene hand beslooten,
Het nutte *Werktuig*, dat nooit lyder heeft verdrooten;
Een *Spiegel* en een *Slang* bevat de linkerhand.
Zy leeren, dat deez' Konst is moeilyk voor 't verstand,
En dat voorzichtigheid haar altoos moet beschieren.
De schrand're *Sly* verbeeld, en door den sieren *Leeuw*
De wakkerheid, niet lang voor noodeloos geschreeuw.
Apel, beloonende de daden zyner Zoonen
En kleinere Zoonen, koomt hunn' hoofd met Lauw'ren kroonen,
Als schiedt' hen de lof van Hem, hunn' Vader waard,
Terwyl de schelle Faam hun roem bezuid lang's d'Aard.

L. PALUDANUS.

図5 ハイステル『外科書』蘭訳本の
扉絵の解説

テルを指しているのかあるいは両者かも知れない。

Dewyl hy op's Mans spoor, een langen reeks van jaaren,

De Heelkonst oeffende by Mavors legerscharen,

En door zyn iever, en zyn oordeel, geest en vlyt,

Zich zelf die schoone Konst geheel heest toegewyd.

彼(ポダレイリオス、ユルホルン)は先人(マカオン、ハイステル)を追って、長い年月の間、軍隊で医術を実践した。そして彼はその勤勉、判断、思考、努力によって、立派な技術に専念してきた。

(注) Mavors はラテン語、ローマ神話の軍神マールス Mars の

古語で、詩に用いられ、ギリシヤ神話の武神アレースに相当する。Ieger は軍隊、scharen は軍の古語で、legerscharen は軍隊のことである。

De *Liefde*, een Kindje houd in de eene hand beslooten,

Het nutte *Werktuig*, dat nooit lyder heeft verdrooten;

Een *Spiegel* en een *Slang* bevat de linkerhand.

Zy leeren, dat deez' Konst is moeilyk voor 't verstand,

En dat voorzichtigheid haar altoos moet beschieren.

「愛」を表現していることは、片手(右)に病人をちっとも悩ましたことのない便利な(有効な)器械を握り、左手には鏡と蛇を持っている。これらはこの技術の理解のむずかしいことと慎重(思慮分別)が彼らにとって、常に必要なこと

を教えている。

(注) 「鏡と蛇」は蛇杖の頭に鏡をつけた「フランス式アスクレピオスの杖」のことで、医学・医術のシンボルである。鏡は真実、神秘、知識、心の反映、未来の予見などを象徴する。

De werkzaamheid word door de nyverigste aller dieren,

De schrand're By verbeeld, en door den fieren *Leeuw*

De wakkerheid, niet bang voor noodeloos geschreeuw.

彼らの活躍状況は勤勉なすべての動物たち、例えば器用な蜂のように、また活発な態度は、不必要なほかの動物のさげびを恐れない誇り高いライオンで示される。

Apol beloouende de daaden zyner Zoonen

En kleiner Zoonen, koont hunn' hoofd met Lauw'ren kroonen,

Als achtend' hen de lof van Hem, hunn' Vader waard,

Terwyl de schelle Faam hun roem bazuind langs d'Aard'.

アポロンは彼の息子アスクレピオスと孫(マカオン、ポダレイリオス)の偉業に報いられ、彼らの頭を月桂冠で飾った。彼(アポロン)と彼ら(孫たち)の父(アスクレピオス)の評価に敬意を表すると同時に、輝しい名譽は彼ら(マカオンとポダレイリオス)の栄光をいつまでも、世界中に鳴りひびかせている。

(注) 最後の「彼ら」はマカオンとポダレイリオスを指しているが、ここではこの書物の著者ハイステルと翻訳者ユルホーレンを示すのであろう。bazuind, bazuin はトロンボーン、らっぱのことだ、この扉絵の上部で天使がらっぱを吹き鳴らしている。

この詩文を詠むと大変きれいで、全二十行を四行ずつに五分して、各行の、後尾の文字を記すと次のようにそろって

- 1) oonen-oonen, aamd-aamd.
- 2) aaren-aaren, yt-yd.
- 3) ooten-ooten, and-and.
- 4) ieren-ieren, eeuw-eeuw.
- 5) oonen-oonen, aard-aard.

また各行の最初の文字にも気を配って、ADEHTZ を巧みに取扱っている。

作詩者バルダーヌス L. PALUDANUS (ペンネーム) は本名ブルーク Lambertus van den BROEK で、十八世紀初期のオランダの詩人である。⁽¹¹⁾ 絵の制作者ドュ・ブルール Louis Fabricius DUBOURG (一六九三〜一七四五) はアムステルダム生まれのフランス系オランダ人で、宗教画家として名高い。⁽¹²⁾ 彫版者タンニヒ Pieter TANNIE (一七〇六〜一七六〇) は歴史肖像画彫版を得意とした。⁽¹³⁾ 出版は J. van Waesberge である (これらの名は扉絵の下に小さく記してある)。

三 扉絵の大意

前記「扉絵の解説」の翻訳と多少重複するが、その大意をわかりやすくまとめてみた。

扉絵の中央の月桂冠を頭にした有鬚の人物はギリシャ神話の医神、太陽神アポロンである。彼が右手に握っている杖(蛇杖)はアポロンの息子、医神アスクレピオス自身を表現し、この絵のなかにはとくにアスクレピオスの影像是見られない。

絵の上部の楕円形の額には、原著者ハイステルの肖像が描かれ、下部の額にはオランダ語翻訳者ユルホルンの肖像が描かれている。ハイステルの額の周囲には細かい字で 'Laurens Heister M.D. en Hocheleenaar in Helmstad' 「ローレン

ス・ハイステル、医学博士でヘルムスタットの教授」と囲み、ユルホルンの額の周囲には、Hend. Uthoorn Voorzeker der Heelkonst in Amsterdam 「ヘンドリック・ユルホルン、アムステルダムの外科講師」と囲んである。

しかし解説文によると、この絵を見る人は「ここではハイステルはアスクレピオスの息子マカオンとして、ユルホルンはマカオンの弟ポダレイリオスとして登場している」と思ってもらいたいというのである。ハイステルとユルホルンがともにオランダ軍の軍医だったように、マカオンとポダレイリオスも、トロイア戦争に従軍したギリシャ軍の軍医だったからである。

右上方に描かれた月桂冠を頭にした女子はアスクレピオスの娘ヒギエイアであろう。左側にはヒギエイアの妹と思われるパナケイアがハイステルの額を支えている。解説にはこの二人の名は記していないが、筆者はそうのように断定したい。これによって、ヒポクラテスの誓いの冒頭の「医神アポロン、アスクレピオス、ヒギエイア、パナケイア、およびすべての男神と女神に誓う：」に記された代表的四名の男女神がすべてここに登場したことになる。

扉絵の左下には「愛」を表現することも描かれ、右手には病人を悩ましたことなく、治療に有効で便利な外科器械をたくさん握り、左手には鏡の付いた蛇杖を持っている。鏡付き蛇杖はフランス独特の医学のシンボルで、アスクレピオスの杖の変形である。プーレ^(二四) Poulet がこれを詳しく報告している。こどもの左後方に数匹の蜂とその巣があり、その右にはライオンの顔が描かれている。これは医者の活躍振りを動物の勤勉さにたとえ、蜂の器用さや、ほかの動物の不必要な叫びを恐れない誇り高いライオンの活発さで示している。

以上のことがらは医学の理解の困難なことと、常に慎重さの必要なことを示し、医学・医学の修得の困難なことと倫理の必要性を説いている。アポロンとアスクレピオスに賛美と敬意を示すとともに、マカオンとポダレイリオス、つまりハイステルとユルホルンの著述と翻訳の偉業を褒め称えようと結んだ。絵の最上部で天使が天高くらっぱをひろく世界中に吹き鳴らしている。要するに、この扉絵はユルホルンが尊敬するハイステルの著作を賞賛するとともに、自分自身の



図7 ルクレルク『医学の歴史』の扉絵



図6 『刀圭新報』の表紙

オランダ語翻訳の完成を誇張したくて、巻頭を飾ったものである。

四 『刀圭新報』の表紙に描かれたアスクレピオス

江戸時代から明治の初期までは、ギリシャ神話がまだ普及していなかったと思われるので、当時の医師にはアスクレピオスのこと、またその杖が医学のシンボルであることは理解できなかったであろう。筆者は先年たまたま明治時代の医史学雑誌『刀圭新報』の表紙にアスクレピオスが描かれていることを知った(図6)。

富士川(一五)によれば『刀圭新報』は一九〇九年(明治四十二年)八月に、それまでの奨進医会の機関誌『医談』から名称を変更して発足した雑誌である。奨進医会は一八七六年(明治九年)に富士川すずが雪ゆきらによって広島で創立し、一八八七年富士川游ゆに引き継がれて東京に移り、一八八九年に『私立奨進医会雑誌』を機関誌として創刊した。一八九三年この機関誌が『医談』と変わり、さらに一九〇九年『刀圭新報』に変わった。

『刀圭新報』の表紙の絵の中央には、月桂冠を頭にしたアスクレピオスが、一匹の蛇のからまった杖を左手に持ち、右手を拳

げて祈っているような情景である。彼の膝の上には、薬草と思われる絵を掲載した書物が置かれているが、当時このような書物があったかどうかは疑わしい。彼の足下には奉獻物の代表だった雄鶏がいる。絵の右側に三名の神官らしい人物がならんでいるが、アスクレピオスの前に進むところであろう。左側はるか上方に彼の父で医神、太陽神のアポロンが竖琴 Lyra を手にしている。左側に待てる二人の女子はヒギニアとパナケイアであろうか。

この絵を『刀圭新報』の表紙とした人はアスクレピオスが医神であり、その杖が医学のシンボルであることをよく理解していた人だと想像できる。しかしこの絵が二十世紀初頭の日本人のオリジナルなものとは考えられないので、何から引用したかが筆者の疑問となった。そこで医学関係の図書館で、これと同じ絵を探したところ、野間科学医学研究資料館所蔵のスイスの医史学者ルクレルク著『医学の歴史』^(一六) Histoire de la Médecine の扉絵として、この絵の原画があることを発見した(図7)。

ルクレルク Daniel Le Clerc (一六五二～一七二八) はジュネーブに生まれ、モンペリエとパリ大学に学び、一六七〇年ヴァランス Valence で医学の学位をとった。ジュネーブで開業しながら著述にもはげみ、一六九六年に『医学の歴史』を出版した。その後政界にも入り、一七〇二年から死去するまで州議員を勤めた。彼の名は書物によつて、D. LeClerc, D. Le Clerc, D. Ledere など通り書かれているが、スイス出版の医史学書に D. Le Clerc と記載してあるので、筆者はこれを使用した。^(一七)

さて今となつては誰がルクレルクの『医学の歴史』の扉絵を『刀圭新報』の表紙に引用したかは、記録がないのでまったく不明である。しかし富士川游の令息富士川英郎氏の談話によると、「父はルクレルクの『医学の歴史』を持っていました」ということから、当時の日本の医史学の重鎮富士川游がこの絵を引用した公算が大きいと筆者は推定している。

五 医学の紋章に対する認識

わが国では「アスクレピオスの杖」が紹介されてからすでに二百年以上を経過したが、まだ医学の紋章、シンボルとしての認識が十分だとは言えない。欧米ではわが国にくらべて、医学の紋章が普及しているが、先進国やオリジンのギリシャでも必ずしも正しく使用されてはいない。

日本陸軍では太田(二八)によると、ドイツの陸軍軍医部の影響を受けて、明治十九年(一八八六)に衛生下士官の肩章として「アスクレピオスの杖」を用いた。また明治二十三年新制度として発足した軍医志願兵やそれに続く見習軍医の襟章として、金色の蛇杖を用いるようになった。しかしこれは明治三十八年の服装改正で廃止されたという。このように明治の中期ごろから、一部の人は蛇杖が医学の紋章だということを理解していたと考えられる。明治後期の『刀圭新報』の表紙の絵で、このことが一段と確実になったことがわかる。

国連の世界保健機関WHOは「アスクレピオスの杖」を国連の紋章のなかに含めて、その紋章とした(図8)。世界医師会は「アスクレピオスの杖」に地球儀を添えて紋章としている(図9)。アメリカ医師会(二九)AMAは一九一〇年に「アスクレピオスの杖」を中心とした紋章を制定し、同会発行の図書雑誌に掲載していることが多い(図10)。

ところがアメリカ陸軍軍医部の紋章が「アスクレピオスの杖」でなく、「ヘルメスの杖」であることが誘因となって、世界の国ぐにで多くの医学紋章に、誤まってこれが用いられている(図11)。「ヘルメスの杖」には二匹の蛇がからまり、杖の頭に翼がついていることが多く、平和、幸福を象徴する。元来は商業、通信、交通などのシンボルとして「アスクレピオスの杖」と区別されていたが、ルネサンスのころから両者が混乱して、両方とも医学のシンボルとなってしまった。

一八五六年アメリカ陸軍軍医部は軍属の記章として「ヘルメスの杖」を制定し、彼らが非戦闘員として平和のために働くことをその理由とした。しかし一九〇二年前記のように、このシンボルをそのまま軍医部そのものの紋章としてしまっ



図 8 国連世界保健機関 WHO の紋章
(外国切手の図より筆者抽出)



図 9 世界医師会の紋章
(J.A.M.A. より)

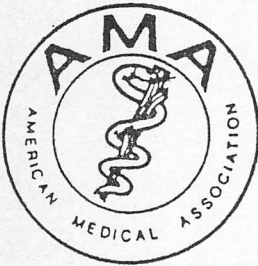


図 10 アメリカ医師会
AMA の紋章
(Schouten より)



図 11 アメリカ陸軍
軍医部の紋章
(Schouten より)

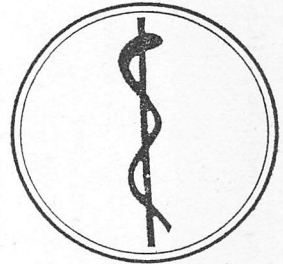


図 12 オランダ医師会
の紋章
(Schouten より)

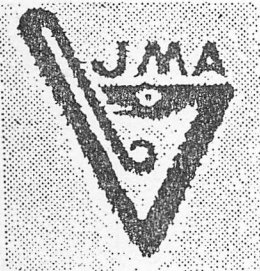


図 13 日本医師会の紋章 (日医ニュースより)

たので、この誤りに拍車をかけたことになった。アメリカ医師会（一九一〇年）とオランダ医師会（一九五六年）はそれぞれの紋章を制定し（図12）、ともに医学関係のシンボルには「アスクレピオスの杖」を用い、「ヘルメスの杖」を用いないよう主張したが、これが徹底しているとは思えない。

筆者は先年来この方面の調査の一端を報告したが、今後は医学の紋章だけでなく、これに関連して薬学の紋章にも研究範囲をひろげたいと思っている。それは昭和三十六年に制定された日本医師会の紋章が乳鉢と乳棒を蛇で図案化したもので、^(二四) 薬学分業が原則の現在、これは医学の紋章よりも薬学の紋章と考えた方がよいからである（図13）。

まとめ

「アスクレピオスの杖」がわが国に紹介されてから二百年以上を経たが、その受容の状況はまだ十分とは言い難い。医学の紋章（シンボル）は「アスクレピオスの杖」を原則とし、「ヘルメスの杖」は医学のシンボルとは認め難い。両者のオリジンにはギリシャ神話により、はっきりした区別があるからである。筆者は医師だけでなく、多くの人ががこの点をよく認識し、正しい医学の紋章が普及するよう念願している。

謝 辞

御生前指導を頂いた中野操先生にこの論文を献呈し、御冥福を祈ります

オランダ文翻訳の指導と援助を受けたブルカルト神父 André BROEKERT（オリエンス宗教研究所）、石野卓弥先生、日蘭学会教職員、および絵画、版画について指導を受けた菅野陽先生、ならびに資料収集などに協力を頂いた富士川英郎、宗田一、酒井シヅの諸先生、以上の方々に感謝の意を表します

文 献

(1) Talbot, J. H.: A biographical history of medicine. Grune & Stratton, 1970. 160-161, 193-196.

- (二) Lindeboom, G.A.: Dutch medical biography. 1984, 2011.
- (三) 杉田玄白著、緒方富雄校註『蘭学事始』岩波書店、一九八五、二四～二五頁(初版一九五九)
- (四) 杉田玄白著、杉本つとむ訳『蘭学事始』社会思想社、一九七四、二九～三〇、一一四～一一五、二二七頁
- (五) 阿知波五郎『近代日本の医学』思文閣出版、一九八二、一三九～一五四頁
- (六) 菅野陽『日本銅版画の研究』近世、美術出版社、昭和四十九年、四〇三～四〇四頁
- (七) 洋学二百年記念会『洋学二百年記念展』昭和四十九年(医学)四三三
- (八) Heister, L. 著, Ulhoorn, H. 訳: *Heelkundige Onderwyzingen* 第3版, Amsterdam, 1776.
- (九) 大島蘭三郎『クーステル外科書の扉絵』『医学選粹』第一〇号、日本医学文化保存会、昭和五十二年
- (一〇) 古川明『ハイステル外科書蘭訳本の扉絵』(例会抄録)『日医史誌』三三、二四二～二四四、一九八七
- (一一) 古川明『ハイステル』『外科学』の蘭訳本の扉絵と医学のシンボル『アスクレピオスの杖』『医学のあゆみ』一四三、七〇七～七〇八、一九八七
- (一二) van der Aa, H.J.: *Biographisch Woordenboek der Nederlanden*. van Brederoode, J.J. Haarlem, 1852, 417.
- (一三) Bryan, M.: *Dictionary of painters and Engravers*. 1964, 5th Ed. (First Ed. 1813~16).
- (一四) Poulet, J.: *Le symbolisme du caducée medical*. Bull. de l'Association Générale des Médecins de France. 91, 4~10, 40, 1978.
- (一五) 富士川英郎『奨進医会と医談』(例会抄録)『日医史誌』三一、五七七、一九八五
- (一六) Le Clerc, D.: *Histoire de la médecine*. Amsterdam, 1723 (Première édition 1696).
- (一七) Dumenuil, R. & Bonnet-Roy, F.: *Les médecins célèbres*. Mazenod. Genève, 1947.
- (一八) 太田隆一郎『軍医の徽章』『蘭学資料研究会研究報告』二四一号、一九七〇
- (一九) Fisher, G.M. & Hendricks, T.A.: *The emblem of the American Medical Association*. J.A.M.A. 169, 1630~1631, 1959.
- (二〇) Hirsch, J.: *Symbolism and Armed Forces medical insignia*. Military Medicine. 122, 256~266, 1958.
- (二一) Schouten, J.: *The rod and serpent of Asclepius*. Elsevier, Amsterdam, 1967.
- (二二) 古川明『医学・歯学・薬学のシンボル』『総会抄録』『日医史誌』二六、二五七～二五九、一九八〇
- (二三) 古川明『医学・歯学・薬学のシンボル・マーク』『歯界展望』五八、九七七～九八六、一九八一

(三) 古川明「医学のシンボル蛇杖の歴史」(総会抄録)『日医史誌』二九、一〇五～一〇七、一九八三
(三) 古川明「日本医師会の紋章を考へよ」『日本医事新報』(昭和六十二年十一月十日原稿提出)

(東京都杉並区)

The rod of Asklepios, symbol of medicine: Its reception in Japan

Akira FURUKAWA

The rod of Asklepios is the symbol of medicine. It is illustrated on the title page of the Dutch translation (1741) of the book "Surgery" by the German surgeon Laurens Heister (1718). Around 1765, this book was imported to Japan. It is thought that this is the first time that Japanese students learning Dutch in the Edo-period saw this symbol. On the title page is a picture showing the rod of Asklepios, Apollo, god of medicine, and his family, portraits of the author and the translator, etc.

There is also an explanation of the picture in Dutch, in the form of a poem, as follows:

Apollo, father of Asklepios, holds the rod that symbolizes Asklepios. In the picture, the reader should look at the portrait of the author Heister as representing Macaon and that of the translator Ulhoorn as Podaleirios, because Macaon and Podaleirios, both sons of Asklepios, were military surgeons as were Heister and Ulhoorn. The author of this poem, after writing on the difficulty of the learning of medicine, admires the family of Asklepios. Again, it appears that Ulhoorn wished to praise not only the merits of the author, but also his own merits.

In the Meiji-period, a medical history periodical called "Tōkei-shimpo" was published. On its cover

there appears a picture of Asklepios and his rod. This picture is taken from the picture on the title page of "Histoire de la médecine" by Daniel Le Clerc, medical historian in Geneva. By that time, Japanese physicians understood the significance of the rod of Asklepios.

The Japanese adopted the rod of Asklepios as a medical symbol from Europe in the eighteenth century, but it is not so popular even yet. In addition, the difference between the rod of Asklepios and that of Hermes is not well understood. I hope this symbol becomes more widely known and better appreciated in Japan.